

7-11		主題	フロア勉強会の学びを 職員全員でケアに生かしてみよう!!	
根拠に基づくケア		副題	～職員の関わり方一つで 利用者の生活が変わる!? ～	
利用者は変わる				
研究期間	12ヶ月	事業所	荒川区立特別養護老人ホーム グリーンハイム荒川	
発表者：東海林 幸奈（しょうじ ゆきな）			アドバイザー：	
共同研究者：梅澤 加奈子（うめざわ かなこ）				
電話	03-3802-7561	メール	greenhaim@seifuukai.or.jp	
FAX	03-3802-7564	URL	http://www.seifuukai.or.jp/	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	荒川区で最初の特別養護老人ホームとして平成元年に開設された定員 100 名の施設です。3フロアからなる従来型の特養ですが、平成16年からユニット的なケアに取り組んでいます。ショートステイ(10名)、デイサービス(40名)、居宅介護支援事業所を併設しています。開設から20年以上が経過したこともあり、現在利用者の使用する備品や生活環境を中心にリニューアルを計画的に行っている最中です。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》 ・業務の標準化を進め、リスクマネジメント委員会で事故の原因と対策を検討し、職員に周知しているにも関わらず、未薬、誤薬がフロア内で続いていた。その都度注意を喚起し、手順通りに進めることを確認してもなかなか事故は減らなかった。 ・ルーティンとしての業務を手順に従って遂行していれば、とりあえず一日が過ぎていく中、決められた業務をこなすことが目的となり、なぜそのケアが必要なのかを考えることがなくなっていた。服薬援助もその延長線上にあり、薬の有効性と危険性を十分理解していないことから来る緊張感の欠如が未薬、誤薬の原因となっているように思われた。 ・反面、利用者の為に何かしてあげたいという意欲が職員からは強く感じられていた。「いい介護をしたい」という思いはあるものの具体的にどのようなケアをどのように提供すれば利用	者の生活の質が向上するのかが分からないというのがフロア職員の現状であった。 《研究の目標と期待する成果》 ・年間を通じて、フロア職員全員参加の勉強会を継続的に開催することで、日頃自分たちが行っているケアを振り返る機会を定期的に作り、根拠に基づくケアを提供することの大切さを理解してもらう。 ・まずは問題となっていた未薬、誤薬が無くなることを期待して、薬の有効性や危険性についての勉強会を開催することから始めることとした。 ・次に三大介護である排泄に焦点を当てた勉強会を開催し、排尿や排便のしくみを体の機能との関係で理解することで、自立に向けた取り組みを各自が自発的に行えるようになることを目標とした。
--	--

《具体的な取り組みの内容》

- ・フロア職員を三つの小グループに分け、係長・主任が講師となり全員に対して下記の項目について1時間の基礎的な勉強会を行い、参加者には必ず感想や意見を書いてもらった。

<22年6月 薬に関する勉強会>

身体への摂り込み方・作用・副作用など

<8月 尿失禁・オムツに関する勉強会>

排尿のしくみ・尿失禁の種類・原因など

<9・10月 排便障害に関する勉強会>

排便のしくみ・便秘の種類・原因など

<11月 排泄に関するアンケートを実施>

利用者にADL向上の兆しが見え始めたため

「排泄に関する勉強会后、利用者に対する自分の対応に変化があったか?」などを尋ねるアンケートを実施。各自の取り組みを確認した。

<23年2月 改善事例の検討会を

ユニット毎に実施>

他の利用者との関わりに応用することを目的に「どういう関わり方が利用者のADL向上に繋がったのか?」を職員間で確認、共有した。

<5月 振り返りのアンケートを実施>

様々な意見や感想があったが多くは次の二つに代表される前向きな感想であった。

- ・「やってもダメ」から「やってみよう」に意識が変わった。
- ・高齢だから「ADLの向上は難しい」という固定観念がケアの方法次第で「ADLは向上する」という考え方に変わった。

《取り組みの結果と評価》

- ・6月に行った薬に関する勉強会后、服薬に関する事故が明らかに減少した。勉強会の前10ヶ月間⇒未薬19件・誤薬3件／学習会后10ヶ月間⇒未薬3件・誤薬2件。
- ・排泄に関する基礎的な勉強会を通し体の仕組みや排泄のプロセスを理解する事で日頃行なっているケアの大切さやなぜそのケアが必要なのかという根拠を職員一人ひとりが理解し、援助する事が出来るようになった。
- ・トイレでの排泄を促す事の大切さを職員全員が理解した事で、排泄リズムを把握し、トイレに行ける利用者にはトイレ誘導を行い大きなオムツから軽失禁パッドに変更になったり、オムツを外す事に成功した利用者もいた。結果は紙おむつ代にも表れ22年度後期(10月~3月)を見ると前年度比で20%もコストが削減された。
- ・日々のトイレ誘導が下肢・上肢の筋力トレーニングとなり、職員が抱える必要はあるものの下肢に力が入るようになった利用者もいた。
- ・自分たちの関わり方の変化が利用者のADL向上に繋がったことで、利用者は勿論のこと職員の介護への自信につながり、プラスのサイクルが出来上がった。

《まとめ》

1時間の基礎的な勉強会を継続的に開催し、職員がその学びを活かして「根拠に基づくケア」を実施したことで、利用者が劇的に変わるという事を学んだ。取り組みは現在も進行している。

《提案と発信》

今回の取り組みで「職員の関わり方で利用者は劇的に変わる」という事を学んだ。利用者の限界を職員が勝手に決めてしまわず、最期の最期まで「利用者の生きる力」を私たち職員1人1人が信じアプローチし続ける事で「人間として当たり前生きる」ことが出来るのだと思います。そんな利用者の姿を見て職員のモチベーションも上がり、介護への自信にも繋がっています。

【メモ欄】